

紙 碑

小川一朗先生のご逝去を悼む

高村 弘毅

本学会員で立正大学名誉教授でもある小川一朗先生が2012年6月4日にご逝去されました。享年93歳でした。

小川先生は神奈川県川崎市中原区の名家にお生まれになり、この地で晩年までお住みになられ、ご逝去されたとのことでした。小川先生の訃報は、山下正治先生（文学部教授・平成25年3月）からお聞きし、名誉教授倶楽部世話人代表としてご遺族に電話で確認した後、大崎校舎の総務課に連絡し、大学のホームページに公示していただき、学園の弔意規定に基づいた対応をしていただいた次第です。

ご逝去後すでに10か月も経ってからのことであり、立正地理関係者のみならず教養部時代の先生方もお別れに立ち会いなかったことに、残念さを共有しているものと思います。ご遺族に謹んでお悔やみ申し上げるとともに、故人の生前のご活躍に敬意を表し、衷心よりご冥福をお祈りいたします。

本来であれば、教養部時代に公私の別なく小川先生を支えられた井出策夫会員に追悼文を記して頂くのが最適と思いましたが、井出会員の体調が優れないご様子でしたので、若輩の小生が小川先生の生前のご功績を称揚し、略式ではありますが以下に記します。

小川先生は横浜にあった師範学校を卒業された後、一時小学校でお音楽も教えておられたようで（ご遺族のお話）、それゆえ、立正大学師範地理学専攻に関わる以前から音楽に傾注されていました。後にピアノ演奏に関する著書『音楽会用—ピアノ独奏名曲集—』（初級）、（中級）も出版されています。この分野でも造詣が深く、歌もピアノも本格派顔負けの才能の持ち主であったようであります。

小川先生の学位記取得は、高等学校教師の傍ら立正大学の田中啓爾先生のもとで工業地帯の研究を始め、その集大成として1964年に、論文題目「工業の集積に関する地理学的研究」（主査：田中啓爾、副査：岸本 實・大村肇）で立正大学から文学博士を取得されております。

立正地理歴史学会を淵源とする立正地理学会は、田中啓爾会長、原田 清副会長の体制で1943年に第1回の研究発表大会を開催しました。1951年の第8回大会では25名の発表がおこなわれました。以降毎年開催され、毎年20名前後の発表がおこなわれました。

現在の会誌「地域研究」の前身の名称「…年度研究報告」の創刊号「立正地理学会1955年度研究報告」によると、小川先生は同学会の庶務委員を担当されています。1952年の第9回研究発表大会では「近代工業の立地」（第一報）—川崎市の工業分布—を発表されています。以降立正地理学会をはじめ、日本地理学会などで数多くの工業地理関係の学術発表をされております。立正地理学会の各種を歴任された後、委員会委員長、三代目会長に就任され、本学会の発展にもご尽力されました。

著書には、共著『川崎—幸区—』（有隣堂）、編著『東京大都市圏の地域変容』（大明堂）、井出策夫会員と共同編著『地理学要説』（文化書房博文社）など、多数刊行されています。

また、田中先生が立正地理の研究代表選手達と称した、小川先生を筆頭に12人の侍ともいえる学兄諸氏の精力的な研究活動での活躍は、その後の立正地理の若手研究者の良い刺激となりました。とりわけ12人の中でも、小川先

生を中心に田中先生の7人の門下生達によって『地理学的総合研究』（古今書院）が発刊されました。同書は川崎市と東京都江東地区との地域比較研究の集大成といえ、また田中地理学を継承した一冊とも位置付けられる点で、特記に値します。

小川先生は京浜工業地帯に関する研究の以外でも、地元川崎市でご尽力されました。川崎市の市史編纂副委員長、川崎市処務事項理事など、さまざまな役職を歴任されました。立正大学では、教養部長として1976年度から6年間にわたり教養部をまとめられました。当時の幹事を務められた山下正治文学部前教授によれば、正月には市川任三、山下富美代、井出策夫、宮本義孝など、主事、幹事、入試委員、副学生部長など教養部幹部の先生方15名ほどをご自宅にお招きし、奥様ご自慢の中華料理をご馳走されたとのこと。周囲への気配りを欠かさない先生のお人柄がうかがえるエピソードといえます。

私事ですが1960年代以降、小此木、山口、柿原、西山、大塚、関根、堀などの副手、助手らとともに、小生も地理学教室、立正地理学会の事務を手伝っていました。小川先生は時折、学会事務局のある研究室に來訪され、我々に励ましの言葉をかけてくださいました。

立正地理学会以外で、小川先生と一緒に仕事をさせていただいて思い出深いのは、第一に川崎市史編纂の資料編纂作業のとき、第二に市内中原区の資料館に通ったとき、第三に北埼玉地域研究センターで熊谷近傍の地下水を研究したとき、そして第四に小川一郎・井出策夫編『地理学要説』出版のときがあげられます。いずれの機会においても懇切丁寧にご教示ご指導頂きました。また、仕事の後での宴席では、先生の造詣ある談義が始まり、同席者を楽しませてくださいました。

このようなことは熊谷校舎でも続いたようで、授業を終えた帰宅途中、JR熊谷駅前の小さな酒場「酒悦」に立ち寄って、教養部の同僚達と酒を酌み交わしながらの話に抱腹絶倒することがお決まりのコースであったとのこと（山下正治先生談）。

代えがたき大きな人材を失いましたが、深い家族の愛情に囲まれながらお釈迦様のもとに旅立たれた先生は今頃、田中先生や二代目会長山口貞雄氏、お仲間達と心ゆくまで地理学談義に花を咲かせていることと思います。

末筆ながら故小川一郎先生のご冥福を立正地理学会会員一同、謹んでお祈り申し上げます。

合掌

2013年6月1日

紙 碑

正井泰夫先生を偲ぶ

元立正地理学会会長の正井泰夫先生は、2012年11月20日に83歳で昇天されました。

正井先生は1929年6月1日に東京市小石川区小日向台町（現東京都文京区小日向）にお生まれになり、東京高等師範附属中学、東京高等師範学校文科を経て、1953年3月に東京文科大学を卒業されました。その後、1954年4月に東京文科大学研究科地理学専攻に進学され、在学中にフルブライト留学生としてアメリカ合衆国ミシガン州立大学大学院博士課程地理学専攻で学ばれ、1960年12月にPh.D.の学位を授与されました。帰国後の1962年3月に東京文科大学で理学博士の学位を取得されました。

1963年4月に立正大学文学部地理学科専任講師として赴任され、翌年7月にお茶の水女子大学文教育学部に転任されました。同大学で助教授、教授に昇進された後、1975年4月に筑波大学地球科学系に教授として移られ、1977年5月から3年にわたり地域研究科長の要職を務められました。その後、1984年9月に立正大学文学部教授に転任され、立正大学地球環境科学部教授を経て、2000年3月に定年退職されました。同年4月、立正大学名誉教授の称号が授与されました。

先生は、教育面では多くの大学院生・研究生、特に外国人留学生を積極的に受け入れ、優秀な研究者と教育者を育成されました。立正大学では、留学生5人を含む9名の博士論文の主査を務められました。また、授業では専門の都市地理学にとどまらず、アメリカ地域研究、地誌学、地図学など、広範囲にわたる講義を担当されました。

この間に、正井先生は輝かしい研究業績を残されています。特に都市地理学、地誌学、地図学の分野での業績が顕著で、代表的な著書では、『都市の環境』（1971）、『日米都市の比較研究』（1977）、『都市地図の旅』（1986）および『城下町東京 大江戸新地図』（1987）などがあります。これまでの単著・共著・監修をあわせた図書は180冊余り、論文も単著・共著をあわせて140本余りにも達します。

先生の学会活動は多岐にわたり、日本学術会議の地理学研究連絡委員会幹事・太平洋学術研連委員長・地図学研究連絡委員会委員を務められました。また、日本地図学会会長（4期）、立正地理学会会長（2期）、日本地理教育学会会長を務められたほか、日本地理学会常任委員（3期）、人文地理学会監事、東北地理学会評議員、地理科学学会評議員、歴史地理学会評議員、関東都市学会理事、国際地図学協会都市地図コミッション委員長、太平洋学術会議カウンシルメンバー、地図情報センター理事長、日本地図センター理事、環境情報科学センター評議員、日本自然保護協会評議員などを歴任されました。

正井先生はその功績により、1987年10月に地理教育に関する表彰（地理教育研究連合会）、1992年11月に日本国際地図学会会長賞（日本国際地図学会）、1995年3月に日本地理学会永年会員功労賞（日本地理学会）を授かりました。また、2006年には日本地理学会名誉会員に推挙され、2010年には立正大学羅奥本賞を受賞されました。さらに、2013年1月7日に従四位瑞宝中綬章が追贈されました。

末筆ながら、先生の当学会も含めた地理学へのご尽力に感謝申しあげ、安らかにお休みくださるようお祈りいたします。



台湾にて（2001年2月14日）

（立正地理学会編集委員会）